

「戦後レジームとは何ですか？」

●オチアイ テツハルさんからの質問

戦後レジームとは何でしょうか。戦後レジームを脱却したと言えるのは、どんな状況になったときでしょうか。

●西田昌司の答え

非常にシンプルですが良い質問だと思います。「戦後レジームからの脱却」はご存じのように、安倍総裁がおっしゃっていることです。私も長い間「戦後体制からの脱却」と言っていましたが、同じ意味だと思います。

戦後アメリカに占領され、進駐軍によって社会の制度が変えられました。一番の典型が憲法です。歴史観もそうです。教育勅語も廃止させられました。私は占領中に作られた制度・仕組み・価値観を総称して「戦後レジーム・戦後体制」と言っています。これから脱却するには、これを取っ払わなければなりません。いびつな空間に我々はあるのだという自覚があれば、これを取っ払わなければならないという気にもなります。ところが国民はその自覚すらありません。私の言っている戦後体制はいろいろな所にあります。個別具体的にモグラ叩きをしても意味がありません。何故、今このようなおかしい状況なのだと国民に自覚してもらわなければなりません。「戦後体制からの脱却」とは、国民が目覚ますことに他なりません。そこで私は「サファリパークから出よう」と訴えています。

動物園とサファリパークは両方とも檻があります。動物はそこから自由に出られません。しかし、サファリパークは檻が目の前にないので、中にいる動物は、捕らわれの身であることを知らないかもしれません。しかし実際は管理された世界であり、見えない檻の中で生きているのです。その見えない

檻のお蔭で、天敵もいなくて安全です。しかも餌も毎日与えられますから豊かです。安全で豊かで、見せかけではありますが自由もある、というのがサファリパークです。しかしこれは管理人がいるからこそ成り立つのであって、管理人が倒れるとこの体制は終わってしまいます。バブルの時に沢山のサファリパークが出来ました。どこかのサファリパークが倒産して、動物に餌が与えられずに餓死したというニュースがありましたが、同じことが日本にも当てはまります。占領体制時にアメリカが日本のサファリパークを作りました。しかし占領期間が終わっても、日本の為政者たち（その多くは自民党でした）は、アメリカが作ったサファリパーク体制をずっと守ろうとしました。しかしその仕組みではもう日本は成り立たないことが、今日では明らかになってきています。世界にはアメリカだけでなく、中国やロシアもありますし、他のアジアの国々も含めた地球全体の関係を考えると、我々はアメリカに飼われているだけではやっていけません。

こう考えていくと、このサファリパーク体制を作った元である憲法に言及せざるを得ません。憲法が一番大きな枠組みです。檻は潰さなければなりませんから、憲法は改正するのではなく廃棄をして、日本人が自由に考えられるようにならなければなりません。安倍総裁は私と同じ考えだと思いますが、現実的などころもあります。私が「憲法廃棄だ」と言うと、安倍総裁は「憲法を廃棄しないのはおかしいけれども、それは占領が終わった時にやっておくべきだった。それを出来ないままに60年も経ってしまうと、乱暴な議論になるのではないか。改正という形にするしかないのではないか」という話をされます。一方で安倍総裁は安全保障に関して、集団的自衛権を認める考えも持っています。集団的自衛権に関して、「集団的自衛権をどこまで行使するのか？地球の裏側まで、アメリカの為に出ていくのか？」といった議論をする人がいますが、法律論で考えるからそのような疑問が出るのです。日本と他国の安全保障の考え方の違いですが、他国は「自分たちの国を守るにはどうすればよいか、その為にはどのような法律を作るべきか」という考え方です。ところが日本の場合は「現行の法律・憲法の枠内で何ができるか」という考えに縛られており、法律論に陥って本質が見えなくなっています。安倍総裁もこの点を指摘しています。

戦後レジーム・戦後体制という見えない檻・サファリパークは見せかけではありますが、日本を豊かで安全な国にしました。しかしそれは閉じ込められた世界であり、これを我々は乗り越えなければなりません。戦後の常識と思われていたことが、実は非常識だったのです。戦後から今に至る期間は長い日本の歴史の中で、例外的な期間なのです。皆がこのことに気づき、催眠状態から覚めた時に、戦後レジームから脱却したと言えます。自分達で考え自分達で行動する、何のタブーもなしに当たり前のことができるようになるのが、戦後レジームからの脱却なのです。そうなるのは簡単なことではありません。ものすごく長い時間がかかります。60年もの間このことを疑問にも感じずに、賞賛すらしてきました。このサファリパーク体制は立派なものだ、と自民党も教えてきました。これを乗り越えるのは並大抵ではありません。しかし乗り越えていかないと我々の未来はないのです。

反訳：ウッキーさん

Copyright：週刊西田 <http://www.shukannishida.jp>